令和５年度第１回 犬山市総合教育会議 会議録

◆開催日時
令和５年６月 29 日（月）午後２時 00 分から午後４時 00 分まで

◆開催場所
犬山市役所　401会議室

◆出 席 者
１　構成員
市　　長　　原　欣伸
教 育 長　　滝　　誠
教育委員　　奥村　康祐（教育長職務代理者）、田中　秀佳、小倉　志保、堀　美鈴
渡邉　智治、木澤　和子

２　アドバイザー
愛知県立犬山総合高等学校校長　森　也寸司

＜事 務 局＞　○経営部
井出経営部長
企画広報課　　古田課長、後藤課長補佐、吉田主事補

○教育部
長谷川教育部長
小幡子ども・子育て監
学校教育課　　大黒課長、髙木主幹兼指導室長、阪下統括主査

◆傍聴人の数
０名

◆次第
１　開会
２　あいさつ
３　議題
・城東小中学校での小中連携教育について
４．自由討議
・教員による非違行為防止について
５．その他
６．閉会

◆会議要旨

【主な意見】

・城東小学校・城東中学校を統一するか、併設にしていくかは、すぐに決められることではないので、長期的に考えていく必要がある。
・新しく建物を作っていくのであれば子どもだけでなく、将来的には、地域の人たちが集うことができて高齢者の方も使えるような施設にしていくことも考えられる。
・城東小学校と城東中学校の間にある市道のメリット、デメリットを考えたうえで取り壊すのか、橋を架けるのか等どう対応するのかを考えていく必要がある。
・一貫校にする場合、同じ施設で9年間学べるのはよいと思うが、小・中を一貫校にするメリット・デメリットを考えていく必要がある。
・住民の方々・保護者方々のニーズを把握しながら、教育の理念を議論していくことが重要になる。
・今後子どもの数は減少していくため、城東地区だけでなく犬山市全体で同じ取り組みをしていく必要がある。
・城東小学校・城東中学校の一貫校化を考えていく上で学区の問題が発生してくるので学校を選択できるようにする、小規模校をそのまま残していくというような方針も考えていく必要がある。
・小中一貫校で子どもたちの教育価値を高め、求心力のある犬山のこれからのまちづくりとして考えていきたい。
・現場の先生たちが、何が苦しくて、それをどう改善すれば、より理想的な教育を子どもたちに提供できるかを考えたうえで一貫校か併設校かを検討していく必要がある。

[redacted]

◆会議録

司会 （古田企画広報課長）	それでは定刻となりましたので、ただいまから令和５年度第１回犬山市総合教育会議を開催いたします。 私、企画広報課の古田と申します。よろしくお願いします。開催に伴いまして、ご案内申し上げます。 本日の会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定に基づきまして、公開とさせていただいております。 また、会議の公開にあたりましては、犬山市総合教育会議運営要綱の規定に基づき、会場内での傍聴のほか、インターネット映画配信サービス、YouTube でも中継を行っております。あらかじめご了承ください。 なお会議の中で個人の秘密を保つため必要がある場合、または会議の公正が害される恐れがある場合につきましては、会議を非公開とさせていただく場合がございます。あらかじめよろしくお願いいたします。 また本日ご出席予定でございました、犬山高等学校校長の石田様につきましては、急な公務があるということでご連絡をいただいておりますので、本日はご欠席ということになっております。よろしくお願いいたします。 それでは原市長からご挨拶を申し上げます。
原市長	はい。皆さん、改めましてこんにちは。
全員	こんにちは。
原市長	それぞれ委員の皆さんも森先生にも日頃から犬山の子どもたちのため、学校教育のためにご尽力ご指導いただけますこと心から感謝を申し上げます。 私が市長に就任させていただいて２回目の総合教育会議になります。今日のテーマは城東小学校と中学校の建て替えについて、議題とさせていただきます。こ

	れはもう皆さんご承知の通りであります。これまでの学校づくりと少し方向性が変わってくることになります。楽田小学校、羽黒小学校、南小学校と違ってくること、今度は城東小学校、城東中学校を一緒に学校づくりをしていかなければならないということであります。つまり、小学校と中学校の共存といいますか。一緒にいろいろな教育をやっていくことを我々は考えていかなければなりませんし、この今あるチャンスを生かして、教育の厚みを増していきたいですし、教育の豊かさを作り上げるような、そんな学校づくりができるチャンスだと思っています。 ですから教育委員の皆さん、森先生にいろいろとご相談申し上げ、投げかけていきながら、これからの城東小学校城東中学校の学校づくりについて議論を深めていきたいな、と思っています。 今後の流れとしては地元の意見も聞かなければなりませんので、検討委員会を立ち上げるなどしてアンケート調査をする。そのアンケート調査や、いろんな考えをもとに基本構想案をこれから作り上げていくことになっていきます。時間があるようで時間がありませんので、皆さんの率直な思いをお聞かせいただきながら、いろいろ議論をぶつけ合えていけたらいいなと思っております。限られた時間ではありますが、どうぞご指導賜りますようにお願いを申し上げます。 そしてもう１点が自由討議の中で投げかけさせていただきます。 この度は本当に皆さんにご迷惑、ご心配をおかけいたしまして、誠に申し訳なく思っています。ご承知の通り、非違行為のあり方について、今まで対策は教育委員会として一生懸命やってきてくれた。学校の先生も一生懸命やっている、頑張っている先生、いっぱいお見えになります。でもそんな中でも起きてしまった。この現実は受けとめなければなりません。だから、じゃあ我々として何ができるのか。子どもたちが安心、安全に通うことができる、学ぶことができる学校づくりが、どうあるべきかということを皆さんといろいろとご意見、議論を深めていきたいという思いで、テーマに掲げさせていただきました。 この点についてもいろいろな思いをご指導いただければと思っておりますので、もうどちらも言うまでもなく、子どもたちのためでありますので、どうぞ引き続きご指導賜りますようにお願いを申し上げながら、まずは冒頭のごあいさつとさせていただきますどうぞよろしくお願い申し上げます。
司会 （古田企画広報課長）	続きまして、滝教育長。ごあいさつをお願いします。
滝教育長	はい。改めましてこんにちは。 教育委員の皆様方にはですね、一昨日の定例教に続いて、本日総合教育会議のご出席ありがとうございます。 今、市長からもお話がありましたけれども、６月の初めに市内の中学校で、40代の男性教諭が男子生徒に対してわいせつ行為をはたらくという、本当にお恥ずかしい事件がございました。市内14小中学校ございますけれども、ほとんどの先生方が、犬山の子どもたちのために、そして犬山の教育のために汗水垂らして頑張っていただいている。 それなのにこうした事案が起きてしまいますと、犬山の先生が皆そうなんじゃないかというふうに疑われてしまうのではないかという、心を痛めているところでございますし、何よりも市長も先ほど、陳謝をいたしましたけど、私も児童生徒保護者はじめ、犬山市民の皆様方には本当にご迷惑、ご心配をおかけし申し訳ないという気持ちでいっぱいでございます。本日の会議でも自由討議の中で、こ

	の件に関わる内容が議論をされますので。またよろしくお願いをしたいということと、また本日の主な議題は先ほど市長も申し上げたわけでありますが、城東小中の新しい学校づくりであります。 こちらはまた夢と希望のある話でありますので、そんな夢と希望に溢れるような議論ができたらいいなということを考えています。特に教育委員の皆様方には、教育長がいるから遠慮してものが言えないということではなくて、とにかく何一つ遠慮をされることなく、ご自由に、ご発言をいただくことをお願い申し上げまして、冒頭の挨拶とさせていただきます。 本日はよろしくお願いいたします。
司会 （古田企画広報課長）	議事にまいります前に、資料の確認をさせていただきたいと思います。 まず、次第でございます。続きまして名簿、参考資料といたしまして、資料３種類。城東小中学校の児童生徒の推移について、城東小中学校の学校施設について城東小中学校改築スケジュールについてというものが参考資料１。続きまして、自由討議の関連資料といたしまして、市ホームページに掲載しておりました情報を印刷したもの。あとは、記者会見６月 14 日に開催いたしました、その際の配布資料となっております。皆様、資料はお揃いでよろしいでしょうか。 それでは議事に移らせていただきます。議事の進行は犬山市総合教育会議運営要綱に基づき原市長にお願いいたします。
原市長	はい。それではここから、私が進行役を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。 本日の議題は先ほどお話申し上げます通り、城東小中学校での小中連携教育についてであります。教育委員の皆さんには城東小学校、中学校へ、学校訪問をしていただいたとお聞きしていますので、まさにリアルに感じてもらったことをお聞きできるのかなと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思っています。 このテーマについては、令和３年度の第１回の会議において、城東小学校中学校についてということで、議題ともなっておりましたが、本日は皆さんからの意見をお聞きする前に、配布させてもらった城東小学校、中学校の現状をご説明させていただいた後に、いろいろと議論を深めていただきたいと思っています。その内容については、これからの児童・生徒の数であったりします。ご承知の通り、今年度から子どもが城東小学校では、約 100 人減った中での学校がスタートいたしましたし、これから半減をしていくという数字が示されるのだろうと思っています。また施設の件とあとは耐力度調査の結果が、昨年度末、３月に改めてしっかり調査結果が出ましたので、その点を皆さんにご報告をさせていただきながら、議論をしていきたいと思います。 それでは学校教育課の方から説明をさせていただきます。
大黒学校教育課長	学校教育課　大黒と申します。よろしくお願いします。 それでは少しお時間をいただき進めさせていただきます。では参考資料の１枚目ご覧ください。城東小学校、中学校の児童・生徒の推移についてでございます。城東小・中学校は市東部に位置して隣接している学校です。校区は非常に広く、１時間あまり歩いて登校する児童もいまして、中学生では自転車通学の生徒が多くなっています。平成 12 年ごろから校区内のいくつかの宅地開発によりまして児童生徒数が増加いたしました。資料１の１枚目、グラフの数字につきましては、基本的に住民基本台帳を基にして将来推計で出していますので、実際の児童・生徒数はこれより少なくなりますことをご承知おきください。その理由とし

	ましては、城東小中学校区から、特別支援学校ですとか、私立学校への進学者がいるからです。少子化に加えまして、令和３年から城東小学校では、児童数の急激な減少に入っております。この表にはありませんが令和３年度末の全校児童は686名でした。学年でいいますと、６年生は４クラスの133名に対して、１年生は２クラスの61名でした。こちら見ていただきますと、令和４年度のグラフ635名とありますが、実際の児童数については629名。この時は、１年生は３クラスで81名、少し持ち直したのですけども、令和５年度見ていただきますと、グラフ542名となっておりますが、今年実際は532名でございます。１年生は２クラスです。城東小学校については、令和10年度に187名を予想しておりまして、各学年２クラスで大体50名程度に落ち込む見込みでございます。下のグラフですけれども、城東中学校については、令和４年度のグラフ、590名とございますけれど実際には17クラス、536名。令和５年度グラフ588名でございますが、実際は19クラス540名。ここ２年ほどは50名程度、他の学校へ進学しております。中学校については、令和７、８年ごろから大きく減少していく見込みでして、令和13年度321名となりまして、９クラス程度の見込みでございます。 右上にございますグラフは、犬山北小学校の校区を変更しまして、城東中学校ではなく犬山中学校とした場合は、さらに城東中学校は減少となります。 では次、１ページ裏面をお願いいたします。城東小中学校の学校施設についてです。左側が城東小学校、右側が城東中学校ですけれども、両方とも校舎を赤色で示させていただいてるところが昭和30年代の建築でして、建築後60年以上経過するもので、黄色が昭和40年代の建築で、50年以上経過しています。水色の部分が昭和50年代、緑色が城東小学校、木造の平屋建てでございます。この２つの学校は隣接しておりますけれども、敷地の間に道路を挟んでおりまして、さらに土地は平らではございません。２校の高低差がざっと10メートルほどありまして、中学校側が高くなって、小学校側が低くなっています。また、それぞれの学校の敷地の中でも、高低差がある学校となっています。 それでは続いて２枚目お願いいたします。私どもの予想としては、先ほどの資料の赤色、昭和30年代の校舎は改築になるのではないかと予想しておりましたが、資料の３枚目なのですけれども、昨年度、耐力度調査を実施しました。耐力度というのは、義務教育学校の建物の構造の耐力の耐える力ですとか健全度を点数化しまして、点数が低いほど耐力度が低いという算定をいたします。その結果につきましては、赤色で示させていただいているところが危険改築となりまして、取り壊しが妥当。したがいまして、取り壊し費用に対しても、国庫補助金の対象となるものでございます。こちらが、城東中学校の西側の２棟という結果になりました。水色と黄色の部分については、改築ではなく、今後30年使用できるよう長寿命化工事が妥当だろうという結果となりました。城東小学校につきましてはすべての建物。城東中学校は、西側２棟を除く全てとなりました。 続いて、裏面をお願いいたします。４枚目となります。２校の改築スケジュールです。こちら耐力度調査実施前に策定したものですけれども、本市にとりまして、２校同時整備は初めての試みとなります。令和７年度に南小学校の改築工事が終了予定なので、その後の令和８年度から工事を着工したいと考えております。昨年度、耐力度調査を実施させていただきましたので、今年度、令和５年度は基本構想案を策定して、令和６年度、基本設計に入り、令和７年度実施設計、令和８年度に工事を着工いたしまして、令和11年度完成を目指したいと考えております。以降の整備にあたり、主な課題につきましては担当課として、４点上げ

	させていただきます。先ほど申し上げましたように、児童生徒数の減少。それから、２校の考え方について。それから、この耐力度の結果をどう進めるかについて。また、両校の間にある市道についてどうするべきかということを課題として考えております。 説明は以上です。
原市長	はい、ありがとうございました。説明は以上であります。 議論に入る前に、ただいまの説明に対して、それぞれの委員の皆さん、質問がありましたら、お聞きをしたいと思いますが、質問はございますか。 よろしいですか。はい、ありがとうございます。 それでは意見交換に進んでいきたいと思います。委員の皆さんの意見交換が終わった後に、アドバイザーの森先生の方にもご指導をいただければと思っています。最初に私の思いを伝えた方がいいのかも知れませんが、僕の意見が押し付けになっちゃう心配があるからあえて申し上げないでおこうと思っています。まず皆さんの議論を聞いて、またそこから、それぞれの意見に対して、皆さんがどう思うのかということを、掘り下げながら、聞いて、審議を深めていきたいと思っていますので、よろしくお願いをいたします。 まず、私が言いたいっていう人がお見えになりましたら、どうぞ。どうぞ、渡邉先生、目があったから、そちらから順にぐるっと回ってでいいですか。では、渡邉先生よろしくお願いします。
渡邉委員	はい。できるかどうかというよりかは、本当に思っていることをあげさせてもらうと、今、隣接しているっていうところで、建物としては小学校、中学校が一緒の棟というか、同じところで本当に小中一貫の何かできる、そういう建物であるといいなっていうのは思っています。それとあわせて、可能かどうかっていうところでいくと、通学区域が広いとかってなったときに、子どもたちもそうですけど、その地域の人たちの憩いの場ではないですけども、公民館的な要素であったりとか。なんかこう、子どもたち以外の方が使えるような、拠点となるといいかなというのは思っています。先ほど言った公民館であったりとか、例えば楽田小みたいに図書館であったり、例えば学習等供用施設っていう、市内の建物が大分老朽化しているのも合わせて、もう一気にそういうのを、城東の地区に持って来られるといいのかなというのは思っています。通学区域の問題とか市道がどうこうとか、グランドが狭い、サッカーのグランドが取れないとかはあるのですけれど、そこを言い出すと、多分何もできないのですけど。まず思いとしては、本当に小中学校というか、本当に城東区域の人たちが集まれる。それによって、周りにまたちょっと住んでみたいなと思う人が増えたりとか。あとは、高齢化が進んでいるというところで、高齢者の方も使えるような機能を持たせるといいかなと思いました。以上です。
原市長	はい。ありがとうございました。木澤さん、いいですか。
木澤委員	小中、６年プラス３年の９年間が同じ所で学べるということが、どういうふうに持っていくかどうかです。すごく、良くも取れますし、ということを考えます。いい意味で言うと、９年間の中の成長。９歳の差の中で、子どもたちが自分たちで感じられるという、体験できるということでは、すごく良いかなと思いました。ただ私、これどこかで語られるかわかりませんが、敷地の真ん中に市道がありますよね。この道をこれからどうしていくのだろうかによって、大分違うのではないかなと思いました。この市道も、例えば廃止といいますか。住民の方たちが、どんなふうに住民の方が利用しているかが、ちょっとわからないので、廃

	止することで、どこまでの、住んでいる方たちの利便性が、大変になるのか、あんまり関係がないのか。その辺も含めて、ここは十分に検討して、この道があるか、ないかによって、大分構想って違わないかなと思いました。その点を住民との関わり、その話し合いの中でどんなふうに進めていくかによって、どっちに動くのだろうなと。不安とかではなくて。期待というか、どうなるのだろうなと思いました。それによって、この９年というスタンスで見ていくと教育は楽しいのだろうなと思います。
原市長	ありがとうございます。堀先生、お願いします。
堀委員	私先ほど大黒課長が話してくださった時に、こんなに子どもが最終的に減るのだったら、城東小学校・中学校だけではなくて、犬山市全体のその学校の数とか、そういうのも一緒に考えていかなければいけないのかなと思いました。それと、ここに、さっきおっしゃったみたいに。これだったら補助金がたくさん出るとか、赤色だったら出るとか。その希望としては、それこそ一貫校とか思うのだけど、お金がすごくかかるな。この水色は、随分かかるのですよね。水色とか全部をなんかしようと思うと、かかるので。もし、そういうふうにお金をかけるのだったら、本当にいろんなことが、ここで体験できるように、先ほど渡邉委員おっしゃったみたいに、地域の人が集えるのか、小さい子たちが集えるのか、老人も、やれるのか、ちょっとそういうものをつけないと、小中学校だけのものでは、やっぱりこれだけのものを整備しようとすると、何かプラスがいるのかなと思いました。さっき木澤さんがおっしゃった、あそこの道、私単純に、あそこに橋掛けて、上を通って行けば良いのかなと想像してしまいました。それだけです。
原市長	はい。ありがとうございます。田中先生。
田中委員	はい。よろしくお願いします。 最初、市長の方から論点、ある程度、枠組みとか論点をいただいた方が、いろいろと考えられるのかなとは思ったのですが、また、後程ご意見聞いて何かあればまた、お話させていただきたいのですが、さしあたって教育の内容・方法、小中連携することによる教育活動、どういうことが、プラスでできるのかっていう話で、そういう論点になるのか、或いは条件とか環境ですね。先ほど建物・敷地の話も配置の話も出てますけど、そういうところで、どういうふうにしていくかっていう、いろいろと論点がすごくあるなと思う中で、さしあたって、ずっとこの小中学校の城東の話が出た時から、とかく他の地域ですと義務教育学校であったり、先ほど話があった一貫校であったりというのが、やはり流行りというか、そういう話が出るところで犬山市がすごく慎重に、小中学校というところで、一足飛びに流行であったり、改革にこう乗っていこうとあえてしてないところが、私すごく評価できるところだなと思いながら、この間の議論を、ずっと見ていたところです。もちろんその義務教育学校が良くないとかということではなくて、その辺り慎重に、住民の方々の思いであったりとか、保護者の方々の思いであったりというところをやっぱり慎重にニーズを把握しながら、或いは犬山の教育ですね。教育のまちであったり、学びのまちとしてどういう形の学校がふさわしいのかと。新しく学校が生まれる、新たにできるわけですから、その辺りの教育の理念みたいなところをじっくりと議論していくことが重要だなと思いました。それで、あとは小学校と中学校が隣接するのか、教育活動を一緒にやっていくのかっていうところは、もちろんこれから議論するところなのですけれども、やはりこの小学校と中学校、そもそも、どうして区別されていたのかと、義務教育とし

	ながら６年間と３年間で分けてきたことは何だったのかという総括なんかも、私も教育学者なのであまり理念的な抽象的な話ばかり、いつもしてしまうのですが、やっぱりそういうところの総括ですね。それはおそらく学校の先生方が、小学校の先生方が、今どういう問題があって、それであれば例えば中学校に進学する時に、小中学校でやった方が、メリットがある、こういうメリットがある。という話が小学校の先生であったり、中学校の先生がそれぞれ思っているような、抱えているような問題であったり、こうありたいと思っている理念みたいなところも、じっくりと聞いた上で、施策を立てていくと良いのか、やっぱり現場であったり地域住民のというところが、一番重要になってくるのかなと今、思っています。 　あとは、ただ分かれていることのメリットで言うと、発達段階は本来、連続的なのでそこで小・中で分かれていることの方が、不自然なのかもしれませんけれども。心理学的であるのか、科学的であるのか、10 歳・11 歳の壁とかっていう言葉があるのですけど、10 歳・11 歳になってくると、発達段階の１つ大人になるというか、アイデンティティが徐々に確立されてきて、例えばこの小学校１年生の子を見た時に、５年生・６年生の子は面倒を見てあげよう、であったり、お兄さんとかお姉さんという自覚が生まれてくると。おそらく、これまでの小学校は５年生・６年生になってくると自分たちが一番上だから、という責任がおそらく生まれる。だから、小学校６年間はちょうど発達段階と自分たちが小さい子をちゃんと見ていかなきゃいけない。自分たちが最上級学年なのだというような自覚が生まれてきたことが、メリットがあったと思うのですけど、それが小中一緒になった時に、その辺りの発達段階との関係。それがプラスになるのか、或いはさらに上の子たちがいた時に、どういうふうになるのだろう。そこは活動で工夫はできると思うのですけれども、そういうところが１つ、どうなるのかなというところと。 　あとは従来の小学校中学校で言うと、圧倒的に中学校になって変わることというと、やはり不登校の激増というのが、もう激増と言って良いと思うのですけれども。どうして小学校から中学校、同じ発達段階も同じように過ごしてきているのに中学校というところに入ると、どういう力が働いて急に学校に行かなくなるのか。私服が制服になったりとかという環境の問題もあるのでしょうし、なぜそこが急に変わってしまうのかというところを考えた時に、この小中一貫であったりこの小学校・中学校が、同じところにあって、同じ活動をしていくということによって、それが、不登校がマイナスの問題ではないのですが、ただ学校に来なくなるっていうこと自体、問題。何かあるわけですから、そこが解消されるのか、その辺りは、以前、他市町の小中一貫の見学なんかも行っていますけれども、他の自治体で先行するところから、一緒に活動したりとか、小中一貫にしたり、義務教育学校にしたり、隣接したりというところで、どういうメリットがあって、デメリットがあって、或いはもう変わらないのかっていうところ。やっぱりベンチマークのようなことも進めて、さらに行くと良いのかなというところを思っているところです。すいません。
原市長	はい。ありがとうございました。奥村さんお願いします。
奥村委員	はい。私からは、１番この４ページの主な課題の中から１つずつお話をさせていただきたいなと思うのですけども。 　まず１つ目のこの児童数へのというところ、学校区の見直しというところなのですが。先ほど堀委員がおっしゃられた、学区の見直しという、他の学区とか犬

	山市全体。例えば、１番近くですと大口は２校から１校にされたという実例があります。けど、犬山市の、先ほど田中委員がおっしゃられた、いわゆる小さい規模の学校の良さ、これは犬山市では里山の小学校３校があるという。この良さで、これを残しているにもかかわらず、中学校を一緒にするのかとか、そういった部分の、犬山市は犬山市の良さがあって。これは、教育委員会だけでなく行政側の、犬山市はそれでもお金をかけて、小規模校を残していくのだ。という、その部分の大きな長期的方針もしっかりと示していかなければいけないなという部分が、私は思いました。 　それから、それによって犬山市の他の学校も、一緒に小・中のいわゆる一貫なのか、併設なのかというのを、例えば４校ありますので４校を同じように今後も進めていくかどうかということも、検討に入れていかなければいけないのかなというのが。これは、かなり長期的な話ですね。これからのこの城東小中学校が終わったら、もうすぐに次のっていうのが、これから先 30 年ぐらいかけてどんどん次々に考えていかなきゃいけない事案になってくるのかなと私は感じたので、その辺りも示していかなければいけないなと思いました。 　それから、この２校の考え方についての部分なのですが、例えば地域特性として、図書館がある地域っていうのは、やっぱり犬山地区と、今回新しく楽田小学校に作られた図書館。例えばこういう中学校の地域、４校というような感じで考えると城東にもあってもいいのかな。例えばこの一緒の併設って中学校と小学校側の真ん中にある、という部分に図書館を作るというのも１つの案かなと思います。これは以前、教育委員会で、日進の小中併設校を見に行った時に真ん中にすごく大きな、すてきな図書館があったのです。こういったところが人の集う場所というところでは非常にいいなという、ところでとても勉強に向かうという、そういう地域特性というのも作れるのかなというふうに。今、その楽田でその地域の図書館とも一緒になっているという部分で、学校の先生方もその図書館を利用して、たくさんの学びができるというところも良いです。というふうに楽田小学校で伺った部分もあって、それも良いと思いました。それから、小中一貫校に関しては、奈良にも以前見に行かせていただいたことがあるのですが、私的な考え、見方としては、併設校の方が非常に学校の運営とか運用については、良いなというところもありました。 　また、先ほどの９年間同じということで、木澤委員さんからおっしゃられた良い部分と悪い部分。良い部分では中１ギャップという１番の部分が、やはり、なくなる。その９年間を通しての成長の発達段階では、中学生が小学生側との触れ合う、いろいろな手助けをするという部分では、非常に良い。ただ悪い部分としては、同じ学校に９年も一緒にいるというところ。そこについては、やはり転校とか転入、越境という部分をトップとして考えるのか、という部分も１つあります。例えば、ここだけすごく良い学校で公平性から考えると、他の学校からこの学校に行きたいなと、すごく理想的な学校ができてしまうと。そういう部分もあったりもするので。そういう越境も良いよ、というような形づくりをするのかどうかというのも、もう１つ考えなきゃいけない。 　３つ目の施設についてなのですが、ここ私ちょっと非常に思ったのが、他校と違うのが、すぐ横に河川が両側に挟まれているのですね。地図から見ると、愛知用水と郷瀬川に挟まれているので。学校というのは、学校としての機能以外に避難所としての使用が非常に強くなっているので、この近隣の方々が避難できる経路、場所というのでハザードマップと、非常にしっかりとすり合わせて、安全な

	方側に、例えば、城東中学校側が、高い位置にはあるのですが、愛知用水があるので、ここが安全性とか、そういった部分でどちらが安全なのかというのをしっかりと見極めて、そちら側に寄せるとか、住民の方がこれから想像だにしない地震災害が起きても大丈夫な、避難できる場所というところも踏まえての場所、位置選定を、僕はしていただきたいなというのが非常に思うところです。 　最後に市道についてなんですが、ここは僕、逆に真ん中に市道があるというのは非常にメリットがあると思いまして、東部中学校で、すごく良い事例がありまして、東部中学校の校舎が一直線に並んでいるのです。真ん中に運動場とその間に道路があるのです。すごい雨が降った時の、災害の時に、そのまま校舎から親が車で迎えに来て、そのまま校舎からすぐに車に乗って帰るという、いわゆるドライブスルーというような形式で、下校するということがありました。例えば今日の朝と夜中ですね、すごい雷があって、すごい雨が降った、昨日、今日ですね。そういったような時に下校しなきゃいけない。学校に避難をするときもあるのですけど、逆に、帰らなきゃいけないという時に、そういった論理で市道をそういったような使い方として残すというのも非常にメリットがあるのかなというように思いました。 　以上です。
原市長	はい。ありがとうございました。小倉さん、お願いします。
小倉委員	お願いします。まず一貫校なのか、併設校なのかというところで考えると、一貫校にした場合、やっぱり学区の問題を整えていかないと、途中から増える子たちがいるので、一貫校より併設校の方が、作りやすいというか、今のままにするのであったら作りやすいのかなと思いました。ただ一貫校で１年生から、９年で中学校の９年生までって考えた時、５、６年生が教科担任制を導入していくと国が言っていて進めている中で、１２３４、５６７８９という区切りがそこにあるとするならば、面白い教育展開もそこに、一貫校にすればできるのではないかと思いました。この犬山のことが、城東地区が良くわかってないのですけど、私の中の城東地区というのは、団地がたくさんあって、四季の丘と、善師野、もえぎヶ丘、その辺の人たちが今、子どもたちが中学生、高校生、大学生になってしまって、大人のまちになってきていると。その人たちが、この城東のまちが、新しい人が入ってこないとするならば、20 年後 30 年後は老人の町になっていくであろうと。そうした時に、ここの施設が、今は学校としての使い方をするけど、20 年後には少し変わった高齢者向けの使い方ができるような、スイッチできるような施設で、地域に愛される施設にならないともったいないなと考えました。その中で、今すぐは老人施設じゃなくても良いのですけど、小学校として使っていて、その半分ずつから少しずつで、将来は大きなところが高齢者施設になるかもしれないけど、何かそういう 20 年後 30 年後のことを想定したものを、考えていかないといけないのかなと思っています。 　今の城東小学校・中学校の保護者のデメリットというか、困っているなというのは、やっぱり送り迎えですよね。遠くから来ている子がいるからこそ、お迎えが多すぎる。道が細くてあっちもこっちも行き来ができない、乗り降りしにくいというところが１番挙げられていて。その整理をするときに、駐車場がちょっと多めに、遠くから来るということを配慮するならば、駐車場があるとか、もっと言えば、遠くから来る子のバスが朝着くとか、わん丸君バスが行き来してくれて、そこに着くとか、なんか、そういうまちづくり的な発想もそこにあったら良いなと思いました。

	あと、気になっているのは、今井の保育園、未来園なのですけど。すごく良くはわかっていないですけど、それぞれの昔の村ですよね。今井村の大事な施設なのだと思ってみえて、そこがなかなか触れなかったりするけれども、いつか何か整理をする時と言ったら、こうして一緒に作る時がチャンスなのかなと思ったり、ここに城東と今井と合わせた保育園ができて、少人数はそれは良いことと言うか、プラスと思う人もいるかもしれないけど、やはり幼稚園の未就園・未就学のところでの１人２人っていう集団っていうのは、集団ではないのではないかなと思うので、そこも一緒に手がけられたらいいなと、少し思うのもあります。 あと児童クラブは別棟にしていただいて、土曜日・日曜日とか、学校に遠慮なく、子どもが預かれるような児童クラブが別棟になっていて、管理とかがしやすくなったら嬉しいなと思いました。以上です。
原市長	はい。ありがとうございます。ただいま、いろいろご意見いただきました。ありがとうございます。それぞれ委員の皆さんからお話いただきましたが、それぞれの発言に対して、何か気になったところとか、お有りになれば、そこについてご指摘いただければと思いますが、特にありますか。はい、ありがとうございます。ないようでありますので、いろいろおっしゃっていただいたので、課題もあわせて、現状思われることを、皆さんにお知らせしながら、また話を深掘りしていければなと思っていますので、よろしくお願いいたします。 まず最初、渡邉さんからお話いただきました集約の件です。これは、まさにおっしゃる通りでありまして、今それぞれ新しく建設しているところ、建設した学校も含めて、地域の皆さんの拠り所になっていたり、児童センターの役割を果たしているなどをしていました。また、２月議会では大澤秀教議員が城東の里づくりということで、先ほどもいろんな方に関わってくると思いますが、ただの学校だけではなくて、城東としての学校を活かしたまちづくりにつなげていくのが良いのではないのかという議会での質問をいただきました。そのあと教育長も熱弁を振るってみえましたので、またそのあたりもお聞きできるときがあれば、お聞きをしていきたいと思っておりますが、集約についてはまさに考えていかなければならないことであって、逆に、何が必要だっていうところを考えていくきっかけになるのが、今回の学校づくりだと思っています。 そして、木澤さんの市道であります。これ本当に正直、悩ましいところです。奥村さんが言われたようにメリットにもなるのではないのかというものの市道でありますから。その市道を確保するのであれば、子どもの安心安全を担保するためにはどうしたらいいのかを考えていかなければならない課題になります。そのためにどうするのか。例えば、市道を言われたように廃止をして、どこかに付け替えることを考えるのか、それとも市道をまたいで、子どもたちが行き来するところを、場所として作っていくのかということを考えていかなければならなくなるのだと思っています。いや、やっぱりそれは難しいから併設校で、それぞれだという考えも当然そこで考えられる選択肢になってくるのだと思っています。 そして、堀先生の子どもが減って、全体で考えていかなければならないのはもちろんのことでありますし、この一貫校でお金がかかるというお話がありました。これは田中先生のことにも繋がっていきます。教育を考えていくのか、それとも経済を含めた環境を考えていくのか、まず、そこは抜きにして考えています。はい、正直。でも、今回の調査結果を踏まえて、本当は、建て替えをしなければならない校舎が、もう少し多いのではないのかと思っていました。でも思った以上に、古い学校もそのまま使えることになるがゆえに、心配されたように一

	貫校にした場合、国の補助金がおりなくなるのではないのかというのは、現実として考えていかなければならない大きな課題であり、堀先生がおっしゃっていただいた通りのことになります。 　田中先生の経済と教育もそうでありまして、義務教育にするのか一貫校にするのか併設にするのかということで、さっきも議会のお話をしましたが、２月議会では義務教育学校にしたらどうだ、という議員さんの提案もありました。これも、やはりメリット、デメリットがあって、いろいろな小中一貫校もイコールになるのですけれども、独自の教育ができるというメリットはあるものの、どうしても小中学校両方の教員の免許が必要になるとか。そうした、いろいろクリアしなければならないところが難しいということで、選択肢としては、義務教育学校、小中一貫校、併設校。その３つからの選択になるのだろうなと思っています。 　そして奥村さんがおっしゃっていただいた、今井はどうするのかという話です。これは小倉さんが言ってくださった未来園もそうなのですけども、小規模校の関わり合いが出てきますので、この点も考えていかなければならないところであります。僕の理想とするものは何かと言ったら、やはり今あるものは、やるべきことをやった上で今の学校づくりは守っていきたいと思っています。でも徹底してやったのだけれど、何ともならない。その時は地元の方にお願いをして、こうした考え方があるということは、正直に向き合っていかなければならないのだと思っています。でも、今はやれることは、どこまであるのかということを突き詰めた上で、そこの判断はしていかなければならないと思っています。それで、これが１つの議論のきっかけになるのではないかということをおっしゃっていただきました。小倉さんの方から。まさにその通りだと思っています。城東中学校は城東小学校だけのことではなくて、先ほど申し上げた今井小学校の子どもたちも城東中学校に登校するようになりますし、北小の線路から東の子どもたちも、城東中学校に通うことになりますので、その辺のあり方も考えてはいかなければならないことだと思っていますが、１つの考え方として、こうやって皆さんで議論をする、地元の人たちや教育関係の方とこれから学校づくりをしていく上で、我々が作らなければいけない学校は子どもたちが行きたいという学校を作ることだと思っています。その学校を作ることによって、例えば今井の人もそんな学校なら行きたいというような、きっかけになるような、これからの考え方になると良いなと。ただ、「関係ない」ではなくて、一緒になるかならないかは別にしても一緒になって議論をしていくことを、我々は考えていかなければならないのだと。市長部局としてはそう考えています。 　それから、小倉さんの送り迎えの件、これはまだまだ解決しなければならないことはたくさんありますが、12 月からコミュニティバスが改編されます。その中で１つ大きく変わったのが朝便を栗栖と今井から増やします。これはやはり朝、送り迎えをする親御さんがいるということ、子どもたちの安全を心配する保護者の方が多いことから、栗栖から犬山中学校までの朝便、中学校へ通う子どもたちがコミュニティバスに乗って、学校に通えるダイヤを新設しました。それと今井から城東中学校についても新設をします。帰りは普通のダイヤで帰れるので、そこはそのままでありますが、朝便を新たに新設することによって、まずは子どもたちの利用のあり方も注視していかなければなりませんが、新しい取り組みとして、子どもたちの足の確保のあり方として一歩踏み出していきたいと思っています。それで池野はどうするのかということですが、池野は今もともとダイヤがあ

	りますので、今、利用して東部中学校の方に通っていただいているという現状があります。私の考えを申し上げると、先ほど田中先生が言われたどちらかを考えると、まずは考えられないので、自分としての理想は小中一貫校が立てられるといいなと思っています。これは何かって言ったら、教育でこの地域の価値を高めることができると思っているからであります。新たな可能性を探っていきたいと思っているからです。だからもちろんお金のことは、最後は考えなければいけないのかもしれません。でも、数字で示さしてもらったように、子どもたちの数は激減するのです。半減してしまうのです。このままでは。でも併設校をこのまま続けるのであれば、この現状は、僕は変わらないと思っています。でも、例えば一貫校で、犬山独自のこの城東地域に求心力のある教育ができるのであれば、先ほど申し上げた城東の里づくりじゃありませんけれども、新たなまちづくりのあり方とあわせて、教育を考えていきたいというのが市長になる前からの僕の思い、考えでありました。でも、ここは現実を見据えてどう判断していかなければならないのかというのは、よく承知をしています。ですから、堀先生が懸念をしていただきました、その懸念が、払拭を少しでもできるように、国の方にアプローチをしていきたいと思っていますし、いろんな手段を探していきたいと思っています。何よりも、繰り返しますが、まずは子どもたちが本当にこの城東小学校、城東中学校に行きたいという学校づくりを考えた上で、僕の理想だけまず申し上げると、小中一貫校で子どもたちのこの地域の教育価値を高めることによって、求心力のある城東づくりのあり方も、まちの成長、犬山のこれからの新しいまちづくりとして、考えていきたいというのが私の率直な思いでありますので、まずはその点を申し述べさせていただきます。今、申し上げた私の話やら、課題に対して少し投げかけさせていただいたので、その点について何かご発言があれば、お願いを申し上げたいと思います。何かありますか。まあこれは僕、１回で終わるものだとは思っていないので。 　どうぞ、田中さん。
田中委員	はい。まだ、まとまってないですけど。例えば小学校、義務教育ということですので、奥村委員がおっしゃったことと関係するのかもしれませんが、城東地区だけそういう学校っていう話になっていくのか。モデルなり、理想なりっていうところを体現化するっていう学校づくりを、私もすべきだと思うのですけど。その時に理想的なものであれば各地区、各学校、犬山のすべての学校が同じような取り組みをしていくような方向に、僕は進んでいかなければいけないのかなと思うのですけど。それは城東という地区だからこうやっていく、例えば犬中であったりとか東部中だったり、別の地区は別の地区で、別の何か学校のあり方みたいな、そういうような構想になっていくのか。まちづくりということになるので、当然地域固有の、それぞれの形があると思うのですけども、ただ教育の形として、仮にそれが理想的なことであれば、じゃあ他地区でも同じようにやっていこうということになって。そういうような考えなのか。ここは城東だけ例えば一貫校で、他は小学校・中学校、通常のって言うとあれですけど、現状でという形になるのか。その辺はどのようにお考えになりますか。
原市長	はい。まずは、この城東小学校と城東中学校で考えていくというのが現実です。全てそれに対応するのは、なかなか難しいと思っています。ただ先ほど申し上げた通り、ここの課題として人口減、子どもたちの数が一気に減っていくというところは、城東地区が一気に進んでいく現状であるがゆえに、そうした可能性のあるまちなのです。善師野駅ある、富岡駅ある、そして、今そうした住宅地、

	住宅が建てられるようにもしていますから。そうしたまちづくりの一体化と、子どもたちの教育が優先でありますが、犬山の城東の新しいまちづくりとセットで考える可能性のある学校だからこそ、手がけていきたいという思いを持って、今申し述べさせていただきました。 以上です。
田中委員	今、理念の理想とかということで言うと、例えばインクルーシブ教育っていうのがあって、せっかく小学生中学生という年齢の枠をとっぱらうっていう理念であるのであれば、障害・個性・特性っていうことを、今は特別支援学校と、基本的に分離教育って言うのですかね、実は皆さんに多分ご存じの通りだと思いますけど、昨年、例えば国連が特別支援学校っていうのは廃止しなさいっていう非常に日本からすると驚くような勧告がされていて。多分これは、特別支援学校はちゃんとニーズに応じた教育をやっている。ちゃんとしているのだと、我々思っていますけど、世界的にはインクルーシブっていうことで、もう統合していくと、同じような環境で同じように学んでいくのだと、多様な人がいる中で学んでいく環境っていうことこそがおそらく、重要なのだということになっていると、例えば現在の課題であったり、現在必要とされているモデルであったり、理念っていうところを体現化するのであれば、例えばそういうインクルーシブ教育っていうことにも踏み込んで議論していくといいのかな、なんてことを私はイメージしていたのですけど。それが城東をモデルとして、じゃあこれを犬山の共通の教育としていこうってことができたらいいなって思います。
原市長	ありがとうございます。おっしゃるとおりです。そうなのですか。僕らの頃を考えると、僕らこそ分離教育だったと思います。あの時は特殊学級って言われていて、授業に一緒になることがなかったじゃないですか。だから、どう接していいのかわからなかった僕らの今の世代が、特別支援教育によって大きく変わって、いいなあと思っていたのですが。世界から見ると、まだまだ甘いのですね。堀先生も、その辺なんかご専門でしょうから。そうなのですね。そういったところも考えることもしていかなければならないのかなと思います。ありがとうございます。
渡邉委員	１ついいですか。
原市長	どうぞ。
渡邉委員	これ、城東中学校の生徒人数というふうに、今示されているのですけど。12年後には200人ちょっとになるという。でも現状では、東部中学校はもうその人数になっているのです。じゃあ、東部中学校は…というふうに、他地区から見ると、もっと人数、他の地域はもっと減るのではないですかとか。そういうところも考えて、先ほどの学区っていう統合ですね、そういったところ。それでもしない、というようなところとか、越境っていうのですかね、やはり小中一貫っていう部分からすると、越境でいいとかそういう。よく聞くのが、あっちの学校の方が良い先生がいるらしいとか、あっちの学校の方が良かったなとか、あっちの学校の方が、校則が良いとか、今まで結構そういうような、保護者の意見というのが出てくるのはあると思うので、まさにその形自体から、もう違うとなると、そういった学区の越境や、学区という部分は、やはりもう一度しっかりと考えなきゃいけない。 それと、里山の学校に関して、いやそれでも残すのだというような部分とか、やはり良い部分もあったりするのですね。大規模校だから行きたいっていう子どもの意見もあれば、小規模校に行きたいっていう意見もあって。そういったとこ

	ろも踏まえて、あり方というのを考えていけばいいかな。だから、逆に小中一貫校で、子どもから見た色んな選択肢が犬山市にはあるのだっていうのも、僕は非常にいいのかなと思いました。
原市長	はい。ありがとうございます。 僕も市議会議員のとき、学校選択制の質問をしたことがあるのです。簡単に断られましたけど。でも、今考えるとやっぱ学校にはそれぞれ先生のいいところがあるので、その議論は必要だとは思いますけども、学校選択制の議論は、今僕の中では無い。ただ、小規模校は行っていただけるようなシステムにはなっているので、そうした良いところを望む方には、行っていただければいいし。でも全体、犬山の学校の学校選択制の越境はどうするということについて、個人的な意見です。教育長は、今日は総合教育会議なので別の場で議論を深めていただければと思いますが、僕の中ではそちらの方は、考えてない。またこれからいろいろ議論を深めていければなというふうに思っています。はい。ありがとうございます。 先ほど課題で、市道とかお金がかかるとか現実的なところは外して、もちろんそこは、最後は皆さんに投げかけなければならないと思っています。ですから、まず併設校のままがいいのか、小中一貫校がいいのか、それとももう１つ、義務教育学校がいいのか、またその他何か、他がいいのか。そうした子どもたちの立場で考えたときに、皆さんならどの学校を作りたいと思われるか、単刀直入にお聞きしてもいいですか。 じゃあ、渡辺先生から。
渡邉委員	僕が思っているのは、先生の移動ができるようになった方が良いかなという。学校は、例えば小中分割、隣同士なので一括でもいいですけども、先ほど教科担任制というのがあった時に、その先生のギャップ、科目によって代わったりとか、やっぱり教えることが変わるというところでの部分で、先生の移動がしやすいふうであれば、どんな形でもいいのかな。義務教育なのか、小中一貫なのか。それをやっていく上において、多分ソフトの部分っていうところで言った時に、先生たち、もちろんその行政の部分とか、学校の先生たちの方向性の統一が１番大事かな。こういう学校にしていきたい、犬山をこういうふうにしていきたい、城東中をこうしていきたいという部分の投げかけとか、そういうのがあると良いかなとは思っています。
原市長	ありがとうございます。 もちろんこれから学校の先生たち、地元の皆さん、いろいろ教育、研究をされる方々、冒頭申し上げたようにこれから検討会を立ち上げつつ、議論を深め、できるだけ多くの皆さんのお話を聞いた上で進めていかなければならないと思っていますし、そうした流れでいきたいと思っています。またいろいろとご指導ください。よろしくお願いいたします。木澤さんお願いします。
木澤委員	はい。うちらの時代と違うと言われてしまえばそれまでですが、我が家の子どもたちの時にも、もう小学校から中学校にね、私学に行くって子たちがみえました。今ほどではないにしても。それをうらやましいとか、良いとかではなくて、小学校の遊んでいて良い時期に、もう塾通いしている子たちがいました。今は、それがもっともっと頻繁になってきて。子どもたちの気持ちってどこなのだろうなとすごく思うことが、子育てをちょっと離れているから余計かもしれませんが、小学校の時に学ぶ、10歳・11歳で学ぶことって何なのだろうなということを、今いろんなところに出会う人たちに感じます。もちろんそういう教育も大事

	ですし、私学がいけないとかそういうことではないですが、そうすると小中一貫校であることで、ひょっとしたら、その中で学びを深めることができるとしたら、どうしても私学に行かせようとかって、中学に行くということはイコール高校にも繋がってくって親さんの気持ちがあるからということは重々知っていますけど、存じているつもりですけど、とっても大事な時期を使われていて、もったいないなという気が、１人の母としては思います。それをどんな形にしていくか。１番多感と言われる、いろいろ考えたい年齢を、もう少し豊かにできる方法は、それは一貫校なのかわかりませんけども、そこがすごく気になっています。じゃあ何なのよって言われたらごめんなさい今すぐと、こうしたらどうですかということは、申すことはできないですが。日々感じていることは、そんなことです。
原市長	ありがとうございます。
木澤委員	答えになっていなくてごめんなさい。
原市長	いえいえ。堀さん
堀委員	はい。さっきお金のこと言いましたけど、やっぱり教育は夢かなと思います。一貫校かどうかっていうと、私事ですけど、孫が公立の一貫校に行っています。東京なので電車に乗って遠いとこまで、でもそこが良いって行ったのは、なだらかに行ける。それとそこは５年生で１区切りです。５年生までと、あと９年生までっていう流れで、中学校へ上がるとか、そういう階段をヒョンと登るみたいなのがないことを思うと、一貫校というものの良さはそういうところにあるのかなと思います。
原市長	ありがとうございました。田中先生。
田中委員	はい。単刀直入に聞かれて、あまりこちらもバッと単刀直入に回答できないと、申し訳ないですけど。先ほど市長が学校選択の話をおっしゃって、私も卒論が学校選択制か学区制か、ちょうど 20 年ぐらい前に流行った時期があって、それを卒論でやって。教育の地域性と地域の教育性という言葉があって、基本的に教育と地域って切っても切り離せないものであって、選択して違うところに行くのではなくて、良いものであれば、それはもう通学区で、自分が通って、自分が住んでいるところでその理想の教育、各地区に作っていけばいいわけだから。通常の、今までわざわざ学校を選択するといって競争原理を働かせるのではなくて、地域住民として学校作っていくっていうのが理想ではないかみたいなことを書いた記憶があって、それ思い出しながら。そこから、結局最初に申し上げたことと同様なのですけれども。じゃあ、もう制度を変えた方が、学校制度。例えば学校選択は、まさにあの時に品川区なんかで、やられていたように思います。６・３制を５・４制にするとか、その学年の枠組みを変えるとかですね。いろんな制度とか枠組みをいじって、いろんな試行錯誤が 20 年ぐらい前あったと思いますけど。それが今、流行ってないところ見ると、そこが問題の本質じゃなかったのだろうということだと思うのですね。学校選択も結局、流行らなかったし。恐らく、都市部じゃないと無理っていうのがあると思うのですけども。そう考えると、枠をいじることによって、本当に今ある教育問題が、解消なり改善されるかどうかっていうところが、少し考えさせて欲しいなと。もし、それで一貫校がそこをクリアできるメリットがあるのだっていうところは、私も考えてみたいなと思うのですけども、そこが本当にそうなのか。差し当たって最初に申し上げたのが、現場であり、現場の責任者でやっています専門家である現場の先生たち。小学校の先生や中学校の先生はどういうところが苦しくて、どういう点が改善され

	れば、より理想的な教育が子どもたちに提供できるのかっていうところを、聞いた上で、それが、それは一貫校の方が実現しやすいものって話であれば、検討していけるのかなって今のところは考えています。 すいません。
原市長	いやいや、ぜひいろいろ研究の成果をお示しいただいて、ご指導いただけると嬉しいです。よろしくお願いします。奥村さん。
奥村委員	はい。その前に小中一貫校と併設校の言葉の定義が、皆さん合っているかどうかを確認したいです。小中一貫校って建物が一緒だけでなく、教育が１年生から９年生までで繋がった教育であるということですね。もう１つが併設校。今、城東中学校と城東小学校が隣同士にある。けど、建物が一緒で小学校と中学校がある。いわゆる施設共有型という。それで、どちらを望むかということ。その辺りは、間違いないですか。大丈夫ですか。
原市長	一貫校でもいろいろな考え方は、柔軟性を持った考え方はできるだろうし、そうした考えの余地は含めた中で、小中一貫校という表現はしていますので、それはまた受けとめてもらえばいい。そんなガチガチの一貫とすると、今言ったように犬山北小学校やら、今井から通っている子たちもどうなるのだっていう話になる。
奥村委員	一応、法的上その辺りって、ガチガチに分かれているのです。だから、しっかりとその辺りの定義が、小中一貫校ということと、併設校という部分では、ものすごく違いがあるので。その辺りが、建物を１つにするというイメージなのか、そこも。すごく僕は違うと思う。それで奈良の小中一貫校を見に行ったのと、日進の併設校を見に行ったというものの、すごく大きな違いがありました。だから、ただ単に、まずは建物を一緒にしますよ、という大まかな括りなのか。そういったところが、教育に対してとか。それが本当の外の周りの小学校の学区の違いとか、そういう問題っていうのがいっぱい出てくるのですよね。ですから、そこは何回か、もう一度しっかりと考え直さないと難しい。だから、それを見てきた上での私の思った判断としては、その建物が１つ、一緒で小学校と中学校があって、併設校というような考え方が、僕はいいなと思った。体育館は１つ、プールも１つ、運動場も１つ、小中学校の建物が１つ。１つと言うか、棟がいくつかあるかとは思うのですけど。僕はそれが理想ではないのかなというふうに。そこから踏まえて、学校の教育プログラムっていうのも、先ほど田中委員がされた、そこの中での３年制なのか、９年制なのか、６年制なのかという部分を改めて考える。と言うのも、それをしてからでも、まだいいのかなっていうのも１つあるのですよ。非常にそこの辺りが、特殊性をあまりにも持たせるのも、やっぱり地域性の…。だったら僕は、学区をいわゆる越境ができるようにしないと、公平性が保てないと思います。だから、ただ単に建物等を１つの合併した。僕はその方がまだ地域も、すごく理解もしやすいし、皆さんが入ってきやすい。なおかつ図書館みたいなそういったものを真ん中に置くことによって、いろんな地域の方が出入りしやすいなというのも思いました。
原市長	はい。ありがとうございます。小倉さん、お願いします。
小倉委員	いろんなこともとっぱらってお金のこともだし、区切りとかもとっぱらって考えた時、私は一貫校を作りたいと思っています。ただ、奥村さんが言うように、選べるいろんな教育があって、子どもが選べたらいいなと。私は小さな学校に行きたい、小さな学校に行きたいから、ここの学校に行きたい。私は大きな学校に行きたい。将来は私立の中学校に行きたいとするならば、小中一貫ではなくて、

	小学校６年間の小学校に行って、私立の学校を選ぶっていうのも１つの道ですし。自分はこんなふうに行けたらいいなと、もちろん小学生がそんな考えて、自分が選ぶわけじゃないと思いますけど、親と子どもと相談して、どんな歩み方がいいのかなっていうのが選べたらいいなと。それが途中で、高学年になって、やっぱり私ずっと続けて勉強するのがいいから城東の一貫校に行きたいとか、そこのスイッチがすぐできるとか。とにかく自分で、どんな学校に行きたい、こんな学校に行きたいって選んでいけたらいいなと、すごく思います。今の現状としては、自分が希望するところに行かせてもらっていますよね。小さなところに行きたいって、リセットしたいっていうことで、行かせてもらっていたりとかするのですけど。それをもっとオープンに、情報共有して選べたらいいのではないかなって。私立で小中一貫校の学校に行っている子が、私立の中学校に行きたいからといって、中高の一貫校に行きたいからといって、こっちの小中一貫校から受けようとすると、良くないからと言って公立に戻ってきて、私立を受験されようとしている人がいたりとか。なんかそんなことを考えると、その高校受験のところとかじゃないけど、そういうふうなスパンで考えないといけない一貫校なのだなっていうのも思ったのもあります。だけど、ただ、一貫校でいいなと思うのは、やはり教科担任制が入っていたりするところで言ったら、英語のことで言えば、小学校は本当に遊びみたいに楽しくやって、何となく動詞を使っていたのが、もういきなり中学校に行ったら、文法に入っていたとか、そこの区切りのところが英語は難しいよっていう意見が出ています。それが、一貫校にしたら、その辺はフラットにできるのかなって思いました。
原市長	ありがとうございました。様々ご意見いただいて、ありがとうございます。 何か言い足らない、もう１回発言という方がお見えになれば。いいですか。 では、まさにここで、新しい学校づくりに注力をされて、総合高校として、本当に作り上げた人です。めちゃくちゃ苦労していますし、めちゃくちゃ動き回って、本当に総合高校としてスタートされているので、ぜひ森校長先生の方から教育観も含めて、いろいろとお話をいただけるとありがたいと思います。よろしくお願いいたします。
森校長	すいません。資料いただいた時に、全く他人事じゃないというのは、よくわかっています。県立高校は、今年度から 2035 年までかけて、再編将来構想というのをやっていきます。原因の１つは、その 35 年までの間に、県内の中学生が約１万 4000 人減少するという、衝撃の数字が出ているからです。現状は２校に１校が定員を割っているというような状況でもありますので、そういう中で、どうやって状況を打開するかって言ってしまうと、すごく後ろ向きの話で、整理して統合して、学校数を減らせばいい。多分その発想でずっとやると、どこまでいっても減らし続けるしかないと思ったので、発想を変えちゃえと思ったのが私です。学校を変えたいっていう思いはあったので、県教委が大っぴらに変えていいぞと言い始めた。やっとこのチャンスが来たかというような話でもありますし、文部科学省が普通科改革ということを、ものすごい勢いで言い始めた。という中で、普通科ではなくて、弾力性が高い総合学科という方法をとったというところです。やるのだったら、後になればなるほど、何をやっても２番煎じ３番煎じになる。真似しただけでしょという話になるので、前例がなくて、今も非常に苦労していますし、そこに首突っ込まなきゃ違った人生があっただろうなと。正直言って、思いますけれど、本当に多様な生徒がいて、ちょうど今日の中日新聞にも載ったのですが、「この人」っていうのがこのぐらいの記事が出ていて、うちに在学して

	いる最中にダンススクールを経営し始めて、今ＳＤＧｓのファッションイベントだとか、それから夏休みに小学生を集めて、そういう学校みたいなものを開いたりしている女の子がいたり、趣味はサーバーの運営ですと言って、与えられたタブレットに入っているアプリを使いすぎて壊しちゃったという子がいたりですね。それから調べてみると、生徒の２、３割はすでに株式投資しています。100 円単位で買えるので。そういう子に会ったりして、先生社会の教員なのに将来設計すらしてないのかと、そういうふうに怒られたり。そうしながら、そういうのを支えられる、多様な生徒をカリキュラムの中で支えられる学校にしてしまえと、そういうふうにしてスタートしたのが本校です。 　市長さんのお話の中に、教育でその地域の可能性を高めていく。というお話があったのですが、まさに多分そうだろう。県で言うと知事部局と教育委員会と分かれてはいるのですけど、私たちの学校でやっていることは、知事部局で何を進めようとしているのか、それは主に対象が多分成人ですよね。社会人を対象にして政策を打っているのですけど、18 歳は青年ですので、高校３年生で１票を投ずることができると。そういうことを前提にして、彼らを大人にしていかなきゃいけない。こういうことを考えれば、高等学校の３年間どういう方向性を持って学校を経営していくのかっていうのは、当然知事部局の施策の方向性っていうのをきちんと見た上で、そこに生徒とソフトランディングしていくという方向性もあって良いだろう。こういうふうに考えて、ＩＣＴやＩｏＴを１つにしたり、それから鶴舞にスタートアップの拠点ができると。あそこも運営がソフトバンクさんだということが、たまたま犬山に非常に関係性があるというご縁もあって。どこかの会社に入って安泰な生活を送る、その会社が５年後 10 年後存在している可能性がないという不確定の時代ですので、だったら自分でこういうことをやれるような会社を作るというのも、実は文科省や経産省も非常に大学に対してお尻叩いているという状況もあるので。であれば、大学さんから、或いは周りの民間企業さんや行政の方々から、サポートいただけるのではないかという、ある意味打算っていう言い方になるかもしれませんが、目論見で今学校を作っているということです。ですから、市長部局と教育委員会というは、分離していくべきものではなくて、ある意味同じようなベクトルを違う分野で、着実に施策として展開していくっていう発想はとても必要なのだろうと思いますし、この地区が、例えばこういう魅力のある学校ができますとなれば、それは犬山市外の人たちに対して、上手にアピールするという必要性はあると思うのですが、これはものすごい大きな求心力にはなるだろうと考えられるので、学校というもののあり方が、ここでなら、うちの方が伸び伸びと生き生きと生活できるのではないの。そういう、転居してでもそこに通わせたいと、場合によっては。そういうパイロットケースになるだろうなと思っているので、個人的にはこれがまさにスタートで、他地区は他地区でまた、ある良い意味で競い合っていければ良いと思うので。ちょっと高校と小中学校っていうのは、多分求められる機能が違うと思いますから、何もかもが一緒にはならないと思いますけど。教育委員会が全部台本書いてくれるからその通りやっていればいいのだ。じゃなくて、自分たちでどういう地域にしていきたいのか、その核にどんな学校があれば良いのか。というのを考えて、それであの地域とこの地域を差別化して競い合っていく。ということも、地域が盛り上がって面白いのではないかなと思っています。言うのはタダですので。僕は言えるのですが。本当に今、四苦八苦と言うか、めちゃめちゃ苦労していますので、本当に。ただ、そういうことに関われる人間っていうのはごく一部の人間で、う

	ちの教員もそこに楽しさを感じている。という教員も数多くいますので、そういう雰囲気を上手に作りながら、地域の方々と学校のあり方が、上手くリンクして、みんなで考えていけると良いなというのは、思っていました。数字だけ見ていると、「あぁ…」っていう、どうしても眉間にしわが寄ってしまう数字なのですけど。どうやって逆手にとるのだろうな、自分だったら。というのが、今、先生方のご意見・お話伺いながら考えていたところです。お金の話は、多分、市長さん初め皆さんもいろいろ考えてくださると思うので。
原市長	はい。ありがとうございました。 森先生、今話された通りで、小学校と中学校、高校は違います。でも、新しい取り組みをしているということでは、いろいろ皆さん興味持たれたのだと思います。 逆にちょっとテーマ外れても、良いものですから、南総合高校のことで何か気になることとか、お聞きしたいことがあればせっかくの機会なので、聞いていただいて。また、犬山のこの教育につなげていけるといいなという気もしましたので。何か疑問があり、お聞きしたいことがあれば。ぜひ、いかがですか。はい、どうぞ。
渡邉委員	先ほども少しお話させていただいたのですけど、受験者数が全く去年と違っていたのが、もう１番の驚きで。魅力発見フェスタの時もちょっとお邪魔して、お話を聞いたのですけど、ものすごく熱くて、トップの方の熱意なのだと思って、見たらすごいやっぱり定員割れをしてないっていうか、募集人数が全く違っていたので、もうただ単にすごいなと思ったのが、今日お会いして第一声だったのですけれども、どうして増えたのかっていうところだけ。
原市長	犬山高校は逆に、数字がすごく割れてしまいました。 どうしてですか。
森校長	なかなか、僕もよくわかりませんが。何て言うのですか。特に愛知県の県立高校っていうのは、これまで高校イコール県立高校っていうようなイメージが多分あっただろうっていうのは正直言って思いますので。原因の多くは、私たち自身の問題だろうと。ほっといても、来るというのはあったのだろうと思いますし。私も娘が小学生なのですけど、あの情報の発信の凄さに比較すると、高校の対外的に、今お子さんがこういう状況ですというのをタイムリーに発信しようという。その点でも、やっぱり全然駄目。それから、ホームページに載せれば、何かこう、相手に伝わるはずだと。私もよく注意されるのですけど。校長室のパソコンでホームページを更新したり。「見る人はスマホなのでしょう」と、はっきり言われる。「こう、わざわざスクロールして見る人なんているの？」「だったら、この一つの画面で言いたいことをきちんと伝えられるようにしなきゃいけないのだよね。」と言われています。家帰っても全く休めないのですけど。あとは生徒に聞いても、ホームページを見るのって、おじいちゃん、おばあちゃんだよ、先生。っていう。その発想が駄目だっていう、こうやって校長室で、1年生に叱られたのですね。だとすると、違った媒体で関心を持ってもらって、より深くにはホームページ。更には、学校案内の冊子。というような形で。昔は新聞だったのですけど、そもそも新聞をとらない家庭も増えていますので。いろんな媒体を使いながら、タイムリーに情報を発信していくのです。しかも、それが事務連絡にならないようにということ。あとは、学校にお邪魔して説明会やる時にも。修学旅行ここです、こんな授業あります。ということだけだと、本当に事務連絡なので、差別化できませんから。何をしたい学校なのだ、うちは。何をするため

	に、こういう学校を作るのだろうということに、共感して欲しい。というので、そこの理念っていうか、ベクトルを示すようにはしていますので、一緒に学校を作ろうよって、その仲間を募集しているから、良かったら受けてみないと言うような発想です。ご参考になるかはわかりませんが。
原市長	ありがとうございます。
堀委員	今、私も仕事で、悩んでいるところが同じなので、ホームページはいかんのかって。１つの画面で、見えるように。発信の仕方とか、向こうが何を求めているのかとか、こっちが何を伝えたいのかっていうところをきちんとしなければいけないってことで、先生良かったですか。
森校長	そうですね。本当に小学生でも、タブレットを使って名刺を作ったり。僕が使っているソフトと同じものを使っています。学校で。だからその授業の中で、名刺を作ったりしているという状況なのです。それを前提にしていかないと、教員特有の難しい説明調の文章をダラダラあげても、誰も読まない。
堀委員	わかりました。
原市長	はい、気を付けます。本当おっしゃる通りだと思っています。はい。言霊ではないけど、言葉にどれだけ魂が入っているかは、すごく大事なことだと思います。本当に皆さん、すごい参考になりましたし、ありがとうございます。他、良いですか。せっかくの機会ですから。はい。
渡邉委員	この後、ちょっとお話できればなと。今日、名古屋経済大学の生徒さんに来ていただいている。入ってこられる生徒さんが、例えば２つあって。先ほど投資の話も少し出ましたけど。新しく入学されてきた生徒さんの意欲であったり、或いは進路ですね。将来の展望とかその辺りは、倍率が上がって、たくさん来ることに、何かそういうモチベーションというか、学習意欲っていうか、主体性とか、そういうところって何かこう、こう変わってきたなっていうところが、先生の実感としてあるのかっていうところと。あと、その情報の発信の話がありましたけども。そして、結局それで募集して、たくさん、倍率も、定員割れの状態から回復したっていうところで言うと。それは保護者に届いたのか、中学生に届いたのか。どういう変化があったのかなっていうのを、お伺いしたいなと思いました。
森校長	次の入試でどうなるかが全然わからないものですから。本当にそんなドキドキしているというのが正直なところなのですけれども。校長室にお弁当を持って生徒が来るようになりました。それはもう決定的な違いですね。これまでもそういって呼んで、特色のある子いっぱいいましたので、呼んで話をするっていうことは、聞くっていうことはたくさんあったのですね。当校でｅスポーツ始めたのも、その世界大会４位の子がいたり、というのはあったのですが。要はランチミーティングみたいな感じで、こういうことをやりたい。と、担任の先生に相談したら、「この人とこの人を抑えておけ」と言われたので、「行ってもいいですか」と来ますね。ですから、そういうところで、なぜ来たのということと、何をしたいのというようなことは、直に話は聞けるような状態になっています。ですから、「校長室でお弁当を広げるの？」と、それで、「校長先生が、直で生徒の１年生の話を、それだけ聞かないかんの？」とかですね。その子たち、また話し足らないと言って４時に来ましたので、同じ日の。「そこまでしないといかんの？」というふうに思われる方もお見えになるのでしょうが、私からすると何のための学校なのかっていうのを問い直していく中で、彼らの可能性を能力に変える高校段階で、という結論なので。だったら、直接聞いて、僕が考えていることと、彼らのニーズがミスマッチを起こさないようにすり合わせをする。そこにお

	弁当がある方が堅苦しくならなくて、お互い言いたいことが言える。言われっ放しではないので、こちらも。という感じではありますね。 　あと、発信の仕方っていうのは、いろんな本を読んで。うちもインスタでやっていて、読んだ本は20冊ぐらいあるのですけど、大抵の方がすぐにフォロワー1万人ぐらいいきますよという。全然ですね。全然で、今やっと400人。なんですが、学校によってはさらにツイッターやったり、そこの中にティックトックで、動画をあげたりというような状況もあります。いずれはもう、そんなの生徒が上手に使うので、生徒に任せたいというふうに思っているので。いずれにしても、生徒目線で、学校の状況はこうなのです。ということを中学生、自分たちの仲間もそうですけども、保護者の方に伝えていく。という方が、上から目線にならないかなというのは思います。今年は6月頭にフロイデで、魅力発見フェスタっていう各学校が集まってやった時も、去年に比べて明らかに高校生の参加が増えていて、高校生が自分の学校の魅力を来場された中学生や中学生の保護者に語っているという。語ろうと思えば、自分たちでまた問い直ししないといけませんので、何を言わなきゃいけないのだと。そういう点でも勉強にはなっているかなと思っています。
原市長	いいですか。
渡邉委員	伺っていて、例えば理念とか、一緒に学校を作ろうよって呼びかけっていうのもそうでしょうけど、何のための学校かっていうのは、大学もそうなのですけど、むしろ高校と大学の親和性があるような気がしたのですけど。一貫校の話もずっとしていて、今の小学校の先生だったり中学校の先生が、何かそういう理念をバーッと語り合ったりとか、何かそういう、それこそ子どもたちを呼びかけて、一緒に学校を作っていこうみたいな。そういうことって、雰囲気とか、できないものなのかなというのは、すごく参考にもなりますし。それができない現状は何がネックになっているのかは、やっぱり考えたい。はい。大変参考になりました。ありがとうございます。
奥村委員	僕今聞きたいこと全部答えられました。カリキュラムの魅力と媒体の魅力っていうのはどういうふうに得られたのですかと、お弁当でというのと、その生徒さんが自分で魅力を伝えるっていうお答えをいただいた。
原市長	ありがとうございます。 　やっぱり我々も頑張って、本当に一生懸命やって地元にこうした新しい挑戦をしてくれる学校があるのはありがたいことだと思っていますし、また、犬山の小中学校の教育にも、イコールになるところいっぱいあるので、ぜひぜひこれからも繋がりを持ち続けたいと思っていますし、犬山の子たちがもっとまた、犬山総合高校、そして犬山高校に行ってもらえるような、地域の学校を大切にしていくことも考えていきたいなと思っています。よろしくお願いいたします。 　本当にいろいろ道逸れましたが、良いお話が本当に聞けたので、すごく良かったと思っています。これがこのまさに総合教育です。総合ですから、総合教育だと思っていますので、また僕もよく話があちこちずれますが、その点はお許しをいただきたいと思っていますので、よろしくお願いをいたします。この話は先ほど申し上げました今日で結論を見出す、今日で終わるなんてもちろん思っていません。今日がスタートでありますので、またこれから委員の皆さんにはいろいろと投げかけをさせていただきながら、我々の思い、言霊をお伝えしながら、これからの犬山の教育のことを、市長部局として考えていきたいと思っていますので、どうぞ引き続きよろしくお願いを申し上げます。

	＜自由討議＞
原市長	それでは、時間も迫ってまいりました。自由討議に入らせていただきます。冒頭、教育長と私の方からお話をさせていただきました。僕自身もこのテーマに、自由討議に、実は時間を使う、そんな使うつもりは思っていません。何が言いたいかって言ったら、つまり教育委員の皆さんに、ぜひこれから何がやれるのかという教育委員さんならではの、議論を深めていただけると嬉しいなという思いで、ここをあえて自由討議のテーマとして挙げさせていただきました。きっと、いろいろと問題等聞いても、内容は同じになるだろうとも思っていますし、もう思いは１つであると思っていますので。この点についてはそんなに、議論をかわそうと思ってなかったということは受けとめてください。 そして、１つアンケート等の文書を教育長と僕の名前で、連名で出させていただきました。これも当たり前でありますが、犯人探しをしようと思ってアンケートしているつもりではありません。当然もう何もありませんという答えがすぐ返ってくるだろうと思っていますし、一生懸命やってくださっている学校の先生方ばかりなので、その確認をした上で、リセットで進めたいという思いで、子どもたちの保護者の皆さんからお聞きをする。そして学校でももう一度確認をして、大丈夫だねっていうところからスタートしたいという思いで、教育長といろいろと議論を深めながら、スタートさせていただきました。もう１つ、自分なりの考えを申し上げると、あえて、保護者の皆さんにアンケートをお願い申し上げたのは、やっぱり学校任せの親御さんもたくさんお見えになる、現実も我々は受けとめなければなりませんし、テーマは何であれ、こうしたことを１つのきっかけとして、学校のことについて、子どもと親御さんが一緒に１つのテーマについて、話してもらうことが、家庭教育に繋がっていくといいなという思いも含めて、発信をさせていただきましたので、教育委員の皆さんだけにはその思いを受け止めてもらえると嬉しいと思って、あえて申し上げさせていただきました。冒頭申し上げたようにこのテーマについては、そんなに議論を深めようとは思っていませんが、もし、ぜひご発言をしたいという方が、お見えになれば、お願いを申し上げたいと思います。もうこの点については、１人１人ご指名をして、お答えを聞くのは差し控えていきたいと思っています。でも思いはお聞きしたいので、この点について私が受けとめるべきことは受けとめさせていただきたいと思います。発言がお有りなる方、よろしくお願いします。
奥村委員	いいですか。 １つ、今回の件について、起きてしまったことということよりも、今後の教育というもの自体は、やはり社会に出て、生きていくためにどうあるべきかということを教えて、導く。教え導くということであるので。豊田市さんでやっている子供人権宣言っていう人権教育をされている。この人権自体は、１人の人が、どういう人がいるのかというところから始まって、相手を認める、自分の人権を、ということで、やはり多種多様な方がいるのに対して、自分の身を守るということと、こういう人がいるのだ。という、その相手を理解するという上でとても大事であって、今回のこと、例えば教育の中で、今回の事件のような方がいても、教育義務であって、この学校の中で守ってもらえるのですけど、そこから出てしまったら、守ってもらえるのは自分での判断になってしまうので。そのためにはやはり人権という部分で、世界的には子供人権宣言っていうものもあります。そういったものも踏まえて、やはり子どもたちにそういったことを教えていくという、今後のものは必要になってくるかな。ましてや、このLGBT法案が通されてい

	るという部分に対しても、やはりそういった人がいても良いのだということ。また、生徒に対しても、そういった子たちがいる。きっと今でも、やはり、自分の中でくすぶっている子どもたちだって、たくさんいるかと思います。そういったことを認め合えるような、多様性を持ったということに対しては、今後必要な教育になっていくのかなというふうに、私は非常に思っていて。だから、これは良いきっかけとして見ていくべきだなと思いました。
原市長	貴重な意見、本当ありがとうございました。今年度の犬山市の取り組みとして、パートナーシップとファミリーシップの制度に向けて、今年度中に作り上げていく予定でいます。そして今、担当の方では、そうした当事者となる皆さんから、いろいろ意見集約をして、いかに実効性のあるものにしていくかということを進み出しているところでありますので、そういったところもいろいろと、ご報告をさせていただきながら、子どもたちの教育につなげていければと思っていますので、よろしくお願いいたします。 他ございますか。はい、お願いします。
田中委員	せっかくの機会ですので。 自由討議とするのが、特に事件・事案があって、事案に基づいて発言するのは、なかなか自由討議で、公開の場でするのは難しいから、どういうふうに当日なるのだろうなと思いながらも、いろいろ考えてきたところがありました。 それで、１つは、２日前の定例会でも、改めてこの非違行為防止の対応マニュアルというものを、改めて教員に徹底するということは、私は、もう本当に大賛成で。ただ、これが形式的になったり、ルーティンにならないように、本当に緊張感を持って、現場の先生方がしっかりと研修を定期的にできるような取り組みは、現場なり教育委員会でやっていく必要があるなと。本当に先生方、改めて緊張感を持って現場で活動していることは、これを機に、せっかくの機会といいますか、こういう機会にやることは非常に重要だというふうに、私も思いました。それで、今回の件をどこまで話ができるのか難しいのですけども。一般的に子どもに対する児童・生徒に対するわいせつ行為っていうのがあったときに、一般的にはパワーハラスメントの類型として、力関係でもって、大人・子ども・教師という力を持った、評価権を握られている子どもが、何もできない。というようなパターンもあると思うのですけども、例えば教員のメンタルヘルスの問題、教員がやはりそういう行為に及んでしまった背景っていうのは、単に今回そのパワー的、力関係のものだけじゃないのかもしれないことは、少し思っていて。その辺り、いろいろなパターンなり、こう分類ができると思うのですけども、適宜、そういうことが起こらないようにということは、それぞれの個別の事例によって、ちょっと対応、難しいのかな。それをいかに防ぐかって非常に難しいなと思ったのですけど、やはり先生方が抱えているものは何なのかということを、どう解消できるのか。健全に働けるような環境というのを整えていくというところが、当然、教員の多忙化の解消の話はもちろん進んでいるわけですけども、そういうところとも関係するのかなと思いました。 もう１点思ったのが、教育が、生徒、子どもたちの側も、性的なものを軽々しく扱ったりとか、下ネタとかそういう、小学生中学生も大好きなのはわかるのですけれども、一方で人の尊厳であったり、人格であったり、当然、人権という言葉でまとめることができると思うのですけど、性であったり、性的な行為に対する認識というのが、おそらく足りてない。だからこそ、こういう問題も起きるし、それがどんどんエスカレートしていくし、ということがあると思うので、こ

	れは性教育の問題なのかなと。或いは、これは、先ほどのパワーハラスメント関係で言っても、例えば痴漢行為があったときに、声を出せない。だけど、それはもうはっきりと、こういう場面だったらそれはおかしいことなのだから、異常事態なのだからはっきりと、ちゃんと断ったりとか、なんかそういう勇気の問題ではないのかも知れませんけど。駄目なものは、駄目なのだっていうことを、はっきりと言うような。言えるような子どもを育てるであったりとか、やっぱり、最近包括的性教育っていう言葉が、いろいろ話題になっていますけども。しっかりと、幅広く性であったり、性的な行為であったり、表現だったりっていうことを本当に、子ども自身も緊張感を持って、これはデリケートな問題なのだよっていうことを、することも必要なのかな。ですから、子どもの教育に対する児童・生徒に対する教育のあり方なんかも、若干見直すところがひょっとしたらあるのかなと。こういうような事態を招かない。子どもの側に、もちろん責任はないのですけども、子どもの側から、むしろ主体的に、いやそういうことは駄目でしょということが言えるような、しっかりとした子ども育てるってことも、今回、論点になるのかなっていうところを思ったところです。
原市長	ありがとうございます。貴重なお話ありがとうございました。はい、どうぞ。
木澤委員	今の段階に加えてだと思うのですけども。性に関心を持つような年齢になってからでは、遅いとは言いませんけど。幼児教育の中で、やっていくことって本当は大切な気がします。自分の体って、ここを守らなきゃいけないのだよ。とかっていうことを、小さな３歳・４歳・５歳の、幼稚園の時代に、もう育んでいくことが小学校と中学になっても、そのことが普通に、こう言葉に出せたりとか、大事なこととして検討できる。もっと小さな時の幼児から、ひょっとしたら必要かなっていうふうに感じていますし、関わっているところではそんな話もするのですけど。それができたらより良いのではないかなと思いました。
原市長	ありがとうございます。他、よろしいですか。 ありがとうございます。私も冒頭申し上げました。やっぱり、皆さん専門性のお立場もおありになるし、教育委員さんとしていろんなお考えを持ってみえます。ですから、私がどこまで申し上げて、それが形になるかならないかは別にして、皆さんに投げかけたいのは、こうした問題を教育委員さんとして、提言として、教育委員会の方に上げてもらうことができると、また違った視点からの、これからの取り組みに繋がっていくことができるのかなと思っています。ですから、それがどこで議論ができるのかというところまで、私も申し訳ございません。承知はしていませんし、触れるところでもないのかも知れませんが。こうした投げかけを受けていただいて、教育委員さんで議論をしてもらう。また、子どもたちのために、どう違法行為に対して向き合っていくのか。そんなご意見を寄せていただければありがたいというお願いを申し上げて、この議論はこれまでにさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いをいたします。 森先生。高校の違法行為みたいな、何か取り組みは、犬山と違ったことは何かあるのですか。
森校長	前職が、記者会見で申し訳ありませんでしたって頭下げる側でした。
原市長	そうですね。映っていましたね。
森校長	教育委員会の教職員課というところで、県立学校の教員の不祥事で記者会見を開く側だったので、非常に心が痛いですけど。県立学校だと、ケースメソッドのような資料を各校長のところに送られてきて。それを基にして、継続的に事例研究みたいな場を設けましょう。こういうような取り組みはしているのかと思いま

	す。ただ、それで劇的な効果が期待できるのかどうかというのは、どうだろうなと思います。ただ、印象的だったのが、僕自身がそういう事案を取り扱った時に、そういう行為をしてしまった教員のご家族かな。家族はこれに関して何か言った？と聞いたところ、死んでしまえと言われたと。その一言でしたというのが、とても印象的ですね。なかなか周りの人たちが、それを受けとめられないし、本人も何でしてしまったのだろう。という思いはあるとは思います。ある中学校の校長先生としゃべっている中で、先生たちが、自分の職場を大好きになれるといいよねというようなお話をされていて。あ、なるほどなというのは思ったところですね。ですから、若い先生であれば、自分のお父さんやお母さんを、自分が働いているときに来てもらって、息子や娘はこんなに頑張っているぞというのを見てもらうだとか。ご家族がお見えになって、できればお子さんを連れてきて、パパやママはこんなに生き生き働いているよというのを見てもらうと、もうちょっと職員もいい意味で、職場環境が明るくなって、結果としてこういうことも少なくなるのではないかな。というお話を伺って、なるほどなと強く感じたのは、つい最近ありました。以上です。
原市長	ありがとうございました。また大いに参考にさせていただきたいと思います。本当にあっという間の時間になりました。いろいろと考え、思いをお届けいただきまして、改めて感謝を申し上げます。この今日の場を次に生かしていく、つなげていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。 それではまず、その他事項で、事務局から報告をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。
古田企画広報課長	はい。その他といたしまして、次回の会議について、簡単にご案内をさせていただきたいと思います。次回の会議につきましては、11月頃の開催予定で進めさせていただきたいと思っております。詳しい日時につきましては、また改めて調整をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。以上です。
原市長	はい。 本当にありがとうございました。教育長、２時間座りっ放しで冒頭の挨拶だけで、何か言いたいことがここまであろうものも、今日は我慢していたのだと思います。どうぞ個々にお聞きいただいて、もう発散させてあげていただきたいと思っています。何がともあれ、もう我々犬山市はもちろんです。そして教育委員会、教育委員の皆さん、さらには、学校現場で頑張っているこれまでの学校の先生たちと一緒になって、これからも子どもたちに全力で向き合っていきたいと思っておりますので、どうぞこれからもよろしくお願いを申し上げまして、令和５年度第１回の総合教育会議を、これをもちまして閉じさせていただきます。 長時間にわたりありがとうございました。
	＜　閉会　＞